



周辺からの眺め

——フェイスはいつスペルアウトされるのか*——

平 井 大 輔

1. はじめに

規範文法などの点で「周辺の・例外的」される現象は、理論言語学においても「周辺の」とされ、研究対象から除外される傾向にある。特に生成文法の枠組みでは、理論的矛盾が生じる可能性があることから、そのような周辺の現象にはあまり目が向けられていない。しかしながら、一方でその周辺の・例外的事実の中にも“order in chaos”とも言うべき、ある一定のルールや特徴が観察されるのも事実であり、このような経験的事実を説明する試みも言語の本質を解明するためには大切な仕事のひとつと言える。そこで、例外的現象の一つとされる(1)の二重受動態の例を考えてみよう。

- (1) a. They seek to evade the point.
b. *They seek the point to be evaded.
c. The point is sought to be evaded. (Fowler (1965) (2002 : 121))
- (2) a. They believe John to be arrested.
b. John was believed to be arrested.

(1a) にみられるように、動詞 seek は補文に主語コントロール不定詞を取る事ができるが、(1b) のように目的語 NP と不定詞節を取る事が出来ない。しかしながら、不定詞補文と主節の両方で受動化されると、(2)の believe タイプの例外的格表示構文 (ECM) における二重受動態のように文法的になる。Fowler (1965) では、この種の文を“monstrosity”と述べており、目的語 NP を取る ECM 構文からの類推で生成されたのではないかと述べている⁽¹⁾。規範文法などの点から見れば、seek のような目的語 NP を選択できないような動詞では、通常、受動化はできないと考えられているため、(1c) のような事実はこの意味で

例外的と言える。

さらに、この事実が奇妙であるのは、(1)でみた事実だけではない。主文動詞によって、この構文が許されない場合もある。以下の例を見てみよう。

- (3) a. *? The play is claimed to have been written by the famous author.
b. * These books were hated to be published by the famous author.

(3)では主文動詞に claim, hate が現れているが、この場合(1)とは異なり、二重受動化が容認されない。Pesetsky (1992) で示されているように、これらの動詞はそもそも目的語位置に NP が現れる事を許さないという事を考慮すれば、(1c) が奇妙である事がよくわかる。

- (4) a. ?? Mary claimed Bill to be the King of France. (Pesetsky (1992 : 28))
b. ?? Bill hated Mary to ride in the back seat yesterday.
(Pesetsky (1992 : 32))

このように非常に奇妙な現象であるため、これまであまり詳細に分析されてこなかった。(1)と(4)の違いの背後には、何が潜んでいるのであろうか。このような現象の裏に潜む本質を探るのも理論の精密化という点では必要である。

本論では、Chomsky (1995) 以降で仮定されているミニマリストプログラムの枠組みにおいて、(1c) に挙げた英語のコントロール不定詞にみられる二重受動態の説明を試みる。特に、Chomsky (2000) などで仮定されているフェイズの概念を考え直し、指定部位置に統語要素を持つフェイズはスペルアウトされるが、それを持たないフェイズはスペルアウトを受けないと仮定することによって、二重受動態の事実が説明されることを示す。より具体的にいえば、外項を指定部位置に持つ他動詞の νP はスペルアウトの操作を受けるが、外項を持たない νP はスペルアウトを受けないと仮定されている。この差異を CP にも適用し、 νP 同様、指定部位置に統語要素を持つ CP と持たない CP が存在し、その補部は指定部位置に要素が直接 merge された段階でスペルアウトされることを主張する。このシステムのもと、二重受動態は Melvold (1992) で示された叙実演算子を CP 指定部位置に持つ補文を含む場合は許されず、それを持たない補文ではそれが可能になる事を示す。

本論文におけるフェイズとそれに基づく派生に関する提案は、Hirai (2003, 2004) で問題点として指摘されていたいくつかの点に取り組む事が出来るであろう。その一つに、フェイズの強弱に頼る事なく、フェイズの構造の点からスペルアウトを規定できるため、さらに妥当な説明に近づく事が期待できる。

本論の構成は以下の通りである。まず、次節で更なる例を紹介し、3節では、先行研究で行われた分析を考察する。4節では、代替となる新たな分析を提案し、それをを用いて(1)と(4)の違いを説明する。5節にまとめと今後の課題をあげる。

2. さ ら な る 例

前節であげた二重受動態の例は、ここ最近になって取り上げられた現象ではなく、1960年代から何人かの文法家によって指摘されている。Fowler は、(5)を提示し主文動詞を(6)のようにまとめている。

Fowler (1965 (2002 : 121))

- (5) a. Now that the whole is **attempted** to be systematized,
b. The mystery was assiduously, though vainly, **endeavored** to be discovered.
c. The darkness of the house (**forgotten** to be opened, though it was long since day) yielded to the glare.
d. No greater thrill can be **hoped** to be enjoyed.
e. Considerable support was **managed** to be raised for Waldemar.
f. The commissioners **proposed** to be appointed will their whole time.
g. A process whereby a tangle of longlasting problems is **striven** to be made gradually better.
h. A new definition of a drunkard was **sought** to be inserted into the Bill.
i. Such questions as Prayerbook Revision & the Mass Vestments, now **threatened** to be authoritatively revised, have to be decided.
- (6) attempt, begin, desire, endeavor, hope, intend, propose, purpose, seek, strive, threaten

さらに、Visser (1963-1973) は、これらの例は1910年代初めあたりから見られるよう

になったとし、以下の例をあげている。

Visser (1963-1973 : 2449)

- (7) a. A sensational atmosphere is being **attempted** to be created.
(1950 Daily Telegraph, 17 March 7/6/ quoted in Visser (1963 : 2449))
- b. It is stated that a reconciliation is **hoped** to be effected through the good offices of an exalted Italian personage.
(1927 Manchester Guardian, 4 Febr., 81b/ quoted in Visser (1963-1973 : 2449))
- c. I let him know what was **intended** to be done.
(1912 E. Phillpotts, The Three Knaves, 191/ quoted in Visser (1963 : 2449))
- d. Each station was **planned** to be worked by a small band of B.B.C. engineers.
(1945 Sunday Times, 8 July 5/3/ quoted in Visser (1963-1973 : 2449))
- e. New and useful offices were **sought** to be created. (Visser 1963-73 : 2449)

この他にも、COBUILD Direct で検索すれば、以下の例をみる事ができる。

- (8) a. Contribution may be **pledged** to be paid later, or charged to Visa or Mastercard. (UK Ephemera : E9000000671)
- b. ... his students were passionately interested in political matters and **wished** to be involved in them. (UK Books : 0064)

以上にあげたように、さまざまな動詞とともに二重受動化が見られる。二重受動化がみられる動詞は、attempt, begin, desire, endeavor, hope, intend, plan, pledge, propose, purpose, seek, strive, threaten, wishなどがあげられる。

このような受動化は何によって可能となっているのであろうか。不定詞の二重受動態は、どのように派生されるのかをミニマリストプログラムの点から探してみたい。次節では、これまで提案されてきた分析を概観し、問題点を探る。

3. 先行研究と問題点

3.1 Gen ey (1999) Tense Switch

上で示した不定詞の二重受動態については、これまで事実の観察こそ行われてきたが、その派生について詳しく論じられる事はなかった。この現象を生成文法の枠組みで理論的に分析を試みたものは Gen ey (1999) であろう。Gen ey は、Chomsky and Lasnik (1993) や Martin (1992, 2001) など音声素性を持たない空主語 PRO の認可に対して提案された Null Case の照合の可否の点から、二重受動態の派生方法を提案している。Chomsky and Lasnik (1993) や Martin (1992, 2001) では、空主語 PRO は他の NP と同様に Null Case という Case を持っており、コントロール不定詞の T 主要部が持つ素性 [+Tense, -Finite] によって照合が行われると考えられている。そのため、コントロール不定詞では PRO を認可するが、この素性を持たない ECM 不定詞では PRO が容認されない。

- (9) a. *They want [PRO to-T (+Tense, -Finite) [create new and useful offices]].
 b. * They often attempt dialects to be suppressed.
 c. *He believes [PRO to-T (-Tense, -Finite) [be the king of France]].
 d. They believe him to be the king of France.

これをもとに、Gen ey は二重受動化を受けるコントロール不定詞の T 主要部は、派生の途中で [+Tense, -Finite] から、[α Tense, -Finite] に変換されると考える (Tense-Shift)。それによると、(10b) の二重受動態は(11)のように派生が進む。

- (10) a. They attempt [PRO [to create new and useful offices]].
 b. New and useful offices were sought to be created.
 c. *They attempt new and useful offices to be created.
- (11) a. to be created [new and useful offices].
 b. were sought [[new and useful offices]_i [to be created t_i]].

(Mismatch なし)

- c. [New and useful offices]_i were sought [t_i [to be created t_i]].

(10a) では、埋め込み補文の T が [+tense, -finite] を持っており PRO の null Case をチェックする。そのため、NP が現れる (10c) では、格の不一致が起こり派生が破綻する。では、二重受動態はどのように派生されるのであろうか。(11)を見てみよう。(11a) から派生が進み、(11b) では、不定詞内の T が Tense-Switch され、[+Tense, -Finite] から [α tense, -finite] に変換される。それにより、目的語 NP は補文 TP にまで移動するがそこでは格の照合が行われず、格の不一致による派生の崩壊が起こらない。しかし、この段階では、目的語 NP は活性化されたまま残っているため、主節 T 主要部が不定詞 TP 指定部にある NP にアクセスし、(12)のような ECM の二重受動態と同様に、主文主語位置まで格照合のために移動し派生が収束する。

- (12) a. They believe/expect the winner to be announced on July 20.
b. The winner is believed/expected to be announced on July 20.

(Gen'ey (1999 : 37))

しかしながら、この分析には経験的・理論的問題点が見られる。第一に、Tense-Switch そのものに関する点である。Tense-Switch がなぜ、どのようなメカニズムで起こるのか具体的に示されていない。実際に(13)のような非文が何に依るのか示されていない。

- (13) a. * The word was tried to be defined in terms of a phonetic matrix.
b. *? The play is claimed to have been written by the famous author.
(= (3a))
c. * These books were hated to be published by the famous author.
(= (3b))

Tense-Switch を適用するには、無条件で可能となるのではなく、インターフェイス (LF か PF) における解釈と関連するような意味的要因か、もしくはその他の要因と関連することが必要であるが、その具体的な理由が提示されていない⁽²⁾。

二つ目に、伝統的にコントロール不定詞の範疇は ECM 不定詞のそれと異なり、CP であると考えられている。もし対象となる範疇が CP であれば、不定詞 TP-Spec 内に移動

した NP はフェイズ不可侵条件 (Phase Impenetrability Condition : PIC)のもと、主節 T 主要部から統語操作を受ける事が出来ないため、主節へ移動することが認められない。

(14) The Phase Impenetrability Condition (PIC)

(Chomsky (2000), Boeckx (2011))

i. Spell-Out the complement of Phase (HP) as soon as Phase (HP) is completed.

ii. $[_{ZP} Z \dots [_{HP} \alpha [H YP]]]$ (HP = ν^*P / CP)

(15) $[T [_{\nu P} \nu [_{CP} C [_{TP} NP_i [T [_{\nu P} V t_i]]]]]]$

(14)の条件は、補文 CP が完成するとすぐに統語部門よりスペルアウトされることを要求する。そうすると、その補部に含まれる NP は少なくとも可視的な統語操作を受ける事が出来ない⁽³⁾。このような点から、Tense-Switch による説明は妥当なものとは考えにくく、新たな説明が必要である。

ここでの問題を整理すれば、PRO の認可に関わる問題と NP の移動の局所性の問題がある。この2点が解決されれば新たな説明が可能となるかもしれない。そこで次に、本論考で議論している問題に直接アプローチした分析ではないが、知見を与えてくれる可能性のある説明として、PRO やその認可システムを仮定しない Hornstein (2001) の提案をみてみよう。

3.2 Hornstein (2001) —NP 移動によるコントロール不定詞の分析—

Hornstein は、以下の例から PRO は Case を持たない可能性を指摘し、コントロール不定詞ではコントローラーとなる NP が移動していると論じている。以下の例を考えてみよう。

(16) a. Who do you want *t* to vanish ?

b. * Who do you wanna vanish ? (Hornstein (2001 : 35))

c. Who do you wanna see *t* ?

(17) a. John's going *t* to leave.

b. John s gonna leave. (Hornstein (2001 : 35))

Lightfoot (1976) などでは、(16b) と (17b) の縮約の可否が格照合の有無に関連づけ

られている。wanna 縮約が認められないのは、want と who の間に格照合が成り立っているからであるとされ、格照合がおこらない (16c) や (17b) では縮約が可能となっている。では、もし PRO が格照合 (この場合 Null Case) を受けるのであれば、なぜ (16c) (17b) では縮約が可能となるのか、別の説明が必要となる。

そこで、Hornstein は PRO を仮定せず Null Case なるものも存在しないと考え、コントローラーとなる主語が不定詞節内から A 移動のように移動する事を提案した。その移動は、(18) のように示される。

(18) John [John [hopes [John to [John win the race]]]].

もし、この提案が正しければ、上で指摘した PRO の存在やその認可に関わる問題がなくなり、二重受動態において Tense-Switch を仮定する必要がなくなる。つまり、Hornstein のこの提案を採用すれば、二重受動化される NP は他の A 移動と同じように捉える事が可能になると考えられる。

しかしながら、Hornstein の提案においても、Chomsky (2000) や Boeckx (2011) らの派生の局所性に従うのであれば、依然、主節から不定詞 TP 指定部位置の NP へアクセスすることが禁止されるという問題が残っている。そこで次節では、PRO の存在を認めない Hornstein の提案に従いながら、スペルアウトを受けない CP があることを提案し、二重受動態の生成方法について説明を試みる。

4. 代 案—フェイズのスペルアウトのタイミング—

本節では、Chomsky (2000) 以降で仮定されているフェイズによる派生の局所性の観点から、スペルアウトされる CP とスペルアウトされない CP があることを提案し、不定詞の二重受動態で観察される事実の説明を試みる。

Chomsky (2000) 以降、統語的操作の適用に関して、その局所性に焦点が当てられ、PIC がその適用範囲を決定している。さらに、Chomsky (2001) ではフェイズの概念に関して細かく指定し、以下のように述べている。

(19) The evidence reviewed in M (inimalist) I (nquiries) suggested that the phases are “propositional”: verbal phrases with full argument structure and

CP with force indicators, but not TP alone or weak verbal configurations, lacking external arguments (passive, unaccusative).

... (W)e take CP and ν P to be phases. Nonetheless, there remains an important distinction between CP/ ν *P phases and others; call the former phases strong phases and the latter weak. (Chomsky (2001 : 12))

(20) Phases

$[\nu^*P$ EA [ν [νP V NP]]]

$[CP$ C [TP T [νP]]]

(19)では、概略、外項を持つような νP と force indicator を持つ CP を、外項を持たない受動態や非対格動詞などの νP と TP と区別している。さらに、外項を持つ νP と外項をもたない νP を共にフェイズとしながらも、前者を強いフェイズ、後者を弱いフェイズとして区別している。強い νP フェイズと CP の主要部は EPP 素性を有し、なおかつ、スペルアウトを受ける範疇であると考えている。これらの仮定をもとに、移動などの統語操作はすべて PIC に従うと考えている。一方、後者の νP はフェイズであるが、EPP 素性を持たず、スペルアウトも受けない範疇であるとしている。

ここでの仮定では、フェイズに強弱の差を設けていることが一つの特徴である。たしかに、初期のミニマリストプログラムでは、素性に強弱の差を設け、現象の説明につとめてきた。しかし、その後、それらの設定をする事は記述的であるため、理論上好ましくないことが指摘されている。そのため、フェイズに関しても強弱を設定するのではなく、別の観点から捉える必要がある。そこで、(19)の考えを修正・拡大し、スペルアウトを受ける範疇を指定部位置に統語要素を持つか否かで区別することを提案する。

もし、この仮定が正しければ、CP も νP 同様にスペルアウトを受ける CP と受けない CP があることが理論上可能となる。事実、CP は叙実的な補文とその他の補文とでは、抜き出しの適用可能性に違いがある事から、同じように見える定形節にも構造的違いがあることが指摘されている (Melvold (1991))。以下では、この違いが本論考で議論している二重受動態の可否にどのような関わりがあるのか探りたい。

定形節の叙実性と抜き出しの可否に関する事実をみる前に、コントロール不定詞が CP (フェイズ) であることをみておこう。(20)に示すような事実から、その範疇は CP であることが支持できる。

- ② a. [To leave together] would be stupid. (Haegeman (1994 : 261))
b. [That the earth is flat] is true.
c. * [The earth is flat] is true.
d. [To write a novel] and [for the world to give it critical acclaim] is John's dream. (Koster and May (1982 : 133))
e. I will arrange [to see a specialist] and [for my wife to see one at the same time]. (Radford (2004 : 130))

(21a) と that 節などの他の CP と思われる要素とを比較すれば、コントロール不定詞は同じ振る舞いをしている事が分かる。つまり、②の事実は、コントロール不定詞が CP である事を示している。また、Chomsky (2001) はフェイズは PF と LF で音韻的に意味的にもまとまったものであると述べている。事実、 ν P フェイズは VP 前置などの操作を受けることができる。

- ② John wanted to pass the exam and [ν P passed the exam] he did.

ν P との平行性の観点からも、コントロール不定詞の範疇は CP であり、フェイズを形成していると仮定できる。

つぎに、叙事的内容を持つ定形節からの抜き出しの事実を考察し、不定詞節との平行性をみておこう。Melvold (1991) は叙実的内容を持つ定形節からの抜き出しは容認度が落ちる事を示している⁽⁴⁾。

- ③ a. * How did Bill reveal [that Anne solved the problem t] ? (Melvold (1991 : 102))
b. How did you wish [that Bill would solved the problem t] ? (Hirai (2004 : 254))

(23a) の補文は主文動詞が reveal である事から叙実的内容を持つが、その節からの抜き出しは非文と判断される。一方、wish の補文はそのような意味内容は持たず、その補文からの抜き出しは可能となっている。Melvold は、前者の補文 CP 指定位置に叙実的内容を示す音声を持たない要素の演算子 factive operator が存在し、補文内の時制要素を束縛

していると考えている。(23a) では、この演算子が補文 CP 指定部位置にあるために、疑問詞 how が、主節への移動の際、その位置を移動の中継点として利用することができないため下接の条件の違反を犯し、非文になっていると分析している。つまり、この叙実演算子の存在が、CP からの抜き出しの可否を決定している。この移動は、(24)のように示される。

- (24) a. * How [_{TP} did Bill reveal [_{CP} OP (factive) [_{TP} that Anne solved the problem *t*]]] ?
 b. How [_{TP} did you wish [_{CP} *t* [_{TP} that Bill would solved the problem *t*]]] ?

では、不定詞の場合はどうであろうか。このパラダイムを不定詞にあてはめ、要素の抜き出しの可否をみてみよう。

- (25) a. ?*How did Mary hate [to learn the election result *t*] ?
 b. *How was he happy [to behave *t*] ?
 (26) a. How do you want [to play the game *t*] ?
 b. How was he eager [to behave *t*] ?

(25)と(26)の例を比べてみると定形節と同じ振る舞いをする事が分かる。hate や happy の補文からの抜き出しはブロックされるが、want や eager ではそれが許される。また、(27)が示すように、動詞 hate はその補文に叙実的内容を取る。

- (27) *Mary hates [to smoke in class, which is false]. (Pesetsky (1992 : 27))

ここでの議論と(27)の事実をまとめるとコントロール不定詞にも演算子 (factive operator) が存在すると考えられる。これは、(28)のようにまとめる事ができる。

- (28) a. [_{CP} OP [C [_{TP} to V DP]]] (叙実的内容)
 b. [_{CP} ϕ [C [_{TP} to V DP]]] (上記以外)

ここで、PIC の概念を捉え直し、指定部位置に統語要素を持つフェイズはスペルアウト

操作を受けると仮定しよう。

㉑ フェイズ不可侵条件 (The Phase Impenetrability Condition (PIC))

(cf. Chomsky (2000, 2001, 2008), Boeckx (2011))

フェイズ主要部の指定部位置に統語要素が直接 merge されれば、フェイズの補部をスペルアウトせよ。ただし、フェイズ主要部は ν とCとする。

㉑の PIC のもとでは、外項を持つ ν P では目的語が wh 句である場合、一気に文頭まで移動せず、一度 ν P 指定位置を経由して移動するが、外項の merge と移動が同時におこるため、問題とならないであろう。この問題はのちに議論する。一方、受動態は NP が直接 TP 指定部位置にまで移動する⁽⁵⁾。

- ㉑ a. [What_i [_{TP} did you_j [_{ν P} t_i [_{ν P} t_j [_{ν P} ν [_{VP} buy t_i]]]]] ?
 b. [_{TP} The book was [_{ν P} ν examined t_i].

この仮定を用いて、本論で議論している二重受動態の事実の説明を試みたい。㉑の PIC では、叙実的内容を含む補文では二重受動態が容認されない事を予測する。実際、この予想は正しい事が分かる。

ここでもう一度、二重受動態の事実を確認しておこう。Fowler や Visser などのデータとインフォーマントから提供されたデータによると二重受動態には、以下のような事実が観察されている。(Fowler の例を㉓)として、Visser の例を㉔)として再掲)

- ㉓ a. Now that the whole is **attempted** to be systematized,
 b. The mystery was assiduously, though vainly, **endeavored** to be discovered.
 c. The darkness of the house (**forgotten** to be opened, though it was long since day) yielded to the glare.
 d. No greater thrill can be **hoped** to be enjoyed.
 e. Considerable support was **managed** to be raised for Waldemar.
 f. The commissioners **proposed** to be appointed will their whole time.
 g. A process whereby a tangle of longlasting problems is **striven** to be made gradually better.

- h. A new definition of a drunkard was **sought** to be inserted into the Bill.
- i. Such questions as Prayerbook Revision & the Mass Vestments, now **threatened** to be authoritatively revised, have to be decided.

㉔ a. A sensational atmosphere is being **attempted** to be created.

(1950 Daily Telegraph, 17 March 7/6/ quoted in Visser (1963 : 2449))

- b. It is stated that a reconciliation is **hoped** to be effected through the good offices of an exalted Italian personage.

(1927 Manchester Guardian, 4 Febr., 81b/ quoted in Visser (1963-1973 : 2449))

- c. I let him know what was **intended** to be done.

(1912 E. Phillpotts, The Three Knaves, 191/ quoted in Visser (1963 : 2449))

- d. Each station was **planned** to be worked by a small band of B.B.C. engineers.

(1945 Sunday Times, 8 July 5/3/ quoted in Visser (1963-1973 : 2449))

- e. New and useful offices were **sought** to be created.

(Visser 1963-73 : 2449)

これらの二重受動態に現れている主文動詞は, attempt, begin, desire, endeavor, hope, intend, plan, propose, purpose, seek, strive, threaten などの補文に叙実的内容ではなく, 未来的指向を表す補文をとる。一方, claim や hate などの叙実的内容を持つ補文を含む場合は容認されない^⑥。

㉕ a. *? The play is claimed to have been written by the famous author.

- b. * These books were hated to be published by the famous author.

上であげた事実を㉔の PIC はどのように説明するのか見てみよう。まず, ㉔の例から考えてみる。㉔は叙実的内容を補文に取るので, 不定詞 CP が完成した段階では, ㉔のようになる。

- ③4 a. [_{CP} OP (factive) [C [_{TP} the play ~~to~~ [_{VP} have been ~~written t~~]]]]]
 b. [_{TP} T (is) [_{VP} claimed [_{CP} OP (factive) [C [_{TP} the play ~~to~~ [_{VP} have been
~~written t~~]]]]]]]]]

③4は、指定部位置に演算子を持つので、②9の PIC の点で C の補部である TP はスペルアウトされる (34a)。したがって、その後、派生が進んでも目的語は主節 T 主要部から統語的操作を受ける事が出来ない (34b)。そのため、③3は派生される事はない。

一方、attempt や seek の場合はどうであろうか。補文が主節の事象よりも未来の事象を表すため (Pesetsky (1992), Martin (1992)), フェイズ主要部の指定部位置に叙実演算子が直接 merge されない。したがって、②9の PIC では、その補部がスペルアウトされない。そのため、補文内の TP 指定部にある NP は、それよりも上にある主要部からの操作を受けることが可能となり、二重の受動化が可能となる。この派生は、③5のように示される。

- ③5 a. [_{CP} ϕ [C [_{TP} [new and useful offices]_i to [_{VP} be created t_i]]]]].
 b. [_{TP} [New and useful offices]_i T (were) [_{VP} sought [_{CP} ϕ [C [_{TP} t_i to [_{VP}
 be created t_i]]]]]]].

以上見たように、フェイズにはその指定部位置に直接 merge される統語要素があり、その有無によって、その補部がスペルアウトされるかどうか決定されると仮定した。ここで提案した PIC により、スペルアウトを受ける CP フェイズとスペルアウトされない CP フェイズが存在し、その違いが二重受動化が適用できるか否かに影響があることをみた。

5. まとめと問題点

本論では、一般的に例外や周辺の現象として取り扱われる現象も理論言語学の研究には必要であるとの考えから、そのような現象の一つとして考えられてきたコントロール不定詞の二重受動態の事実を焦点を当て、これらの事実の説明から新たな理論的発見が可能かどうか、その可能性を探った。

二重受動態はこれまでもさまざまな観察とそれに対する分析が行われてきたが、妥当

な分析は提供されていなかった。そこで、本論考では二重受動態の例をさらに観察し理論的説明を探った。二重受動態を詳しく観察すれば、叙実的内容を持つ補文からの二重受動化は容認されにくいことが分かった。叙実的内容を持つ補文からの抜き出しは、定形節 CP からの場合も困難である事に似ている事から、Melvold に従って、不定詞にも定形節同様の演算子が CP 指定部位置に存在すると仮定した。

この事実をもとに、フェイズ不可侵条件を捉え直し、フェイズの端 (edge) であるフェイズ主要部の指定部位置に統語要素が直接 merge される場合は、そのフェイズの補部は即座にスペルアウトされると仮定した。この仮定では、叙実演算子を持つ補文では、補文 TP がスペルアウトされるため、二重受動化が認められず、一方演算子を持たない補文では TP がスペルアウトを受けないため、その二重受動態の文法性をうまく説明できる事を示した。

このように、周辺のとされる現象から理論的示唆を見つけたわけであるが、ここでの発見には未だ問題点も残っている。ここでその問題点と可能な解決策を見ておこう。

まず、ここで行った一般化にはまだまだ用例が足らず、満足のいくデータが揃っていないため、更なる用例の収集と観察が必要であろう。事実、③⑥のように主文動詞によっては、文法性に揺らぎが観察される。

③⑥ * The word was tried to be defined in terms of a phonetic matrix.

本論考での議論が正しければ、③⑥は適格と判断されなければならないが、それに反して非文と判断する母語話者も多い。今後は、動詞のさらなる分類や例文のチェックが必要である。

さらに、叙実補文で仮定した演算子が理論上、妥当であるかどうかの検討も必要である上、演算子とそれが束縛する変項の依存関係の特徴が未だ明らかになっていない。この依存関係がミニマリストプログラムにおいてどのような位置づけとなるのか、今後より明確にする必要がある。

また、本論考での PIC に対する重要な問題点として、多重指定部が許されないという問題がある。ここでの PIC では、通常の目的語が wh 化される場合、 ν P ではどのように派生がすすむのだろうか。

③⑦ a. What did you buy?

- b. [What_i [_{VP} you [_{VP} ν [_{VP} buy t_i]]]]
 c. [What_i [_{TP} did you_j [_{VP} t_i [_{VP} t_j [_{VP} ν [_{VP} buy t_i]]]]]]

一般的に、(37)の疑問文形成の際、 ν P の多重指定位置が利用されると考えられている。しかし、ここでの PIC であれば、(37b) で外項が直接 merge された段階で補部がスペルアウトされるので、what が ν P 指定位置を利用できない可能性がある。しかし、一つの解決策として、what が移動するまでフェイズが完了していないと考えれば、ここでの問題は回避できるであろう。事実、動詞句転移などは、 ν P に付加されると考えられているため、多重指定部の存在が考えられる。

では、CP の場合はどうであろうか。CP に多重指定部は容認されないであろうか。多重指定部が認められれば、叙実を表す不定詞でも二重受動化が可能となる可能性がある。しかし、英語の CP は、多重指定部が容認されず、指定部は1つしかないと考えられる証拠がある。(38)を見てみよう。

- (38) a. Who bought what?
 b. * What who did bought?
 c. * Who what bought?

(38)に示すように、英語には1つの疑問詞しか許さず、それも上位にある wh から先に指定部位置が占められる。この事実をフェイズに当てはめてみると、CP は統語要素が1つ merge された段階で、スペルアウトを受けると考えられる。つまり、CP フェイズにおいて、先に演算子で指定部位置が埋められれば、その補部はスペルアウトされるため、叙実補文で二重受動態が可能になる事はない。また、仮に CP の上位指定部位置が利用可能になったとしても、受動化移動はA移動であるため、この場合の移動では CP を経由する A-A-A のいわゆる「サンドイッチ移動」や「不適切な移動」になるため、そのような移動は容認されない。そのため、どの手段をとっても二重受動態は不可能になると説明できる。

しかしながら、ここで示した問題とその解決策は、どれも記述的なものであり、何かの原理から導きだされたものではない。今後は、ここにあげた移動そのものに関する問題にも原理に基づいた説明をしなければならない。

以上のように、「周辺の」とされる事実にもその事実を詳しく観察すれば、理論的示唆に富んでいる事がわかった。二重受動態をもとに行った本論文での PIC に関する提案には

依然いくつかの問題点は残っているが、Hirai (2004) などで問題点として指摘されていたフェイズの強弱に関する問題や NP の移動に関する動機の問題等が修正された。その点では、よりミニマリストプログラムの精神に一步近づいたといえる。今後は、新たなデータの発掘も行いながらさらに研究を進める必要がある。

注

* 本論考は、Hirai (2003, 2004) ならびに、関西言語学会第36回大会ワークショップ（2011年6月11日 於: 大阪府立大学）での口頭発表（平井 2011）に加筆・修正を加えたものである。本稿作成前から、橋本喜代太、吉田幸治、西田光一、前川貴史の諸先生方から貴重なコメントを頂戴した。記して感謝の意を表したい。

- (1) Fowler は以下のような文を例としてあげている。
 - (i) a. The man was ordered to be shot.
 - b. They ordered the man to be shot. (Fowler (1965: 121))
- (2) この問題は、Chomsky (2000) 以降のミニマリストプログラムの枠組みでは、強い最小主義のテーゼ (Strong Minimalist Thesis) の点でも捉えられる。つまり、統語操作や全ての要素は、簡潔でありかつ余剰性のないものでなければならず、またインターフェイスの完全解釈に合致するものでなければならない。この点から、不要な操作は認められない。
- (3) 同様の問題を Geney も指摘し、範疇を TP と考えている。しかしながら、のちにみるようにコントロール不定詞は主語節に現れるなど、範疇は CP であると思われる事実が多く観察されている。そのため、TP である可能性は低く、NP の移動に関しては依然問題として残ると考えられる。
- (4) ここでは、移動を受ける要素は副詞の wh 句である。目的語の wh 句の抜き出しについては副詞句ほどの差は観察されない。これは、動詞によって目的語が θ 標示されていることに起因すると考えられる。この差は、不定詞節においてもさらなる議論が必要であるが、ここではこれ以上立ち入らない。
- (5) この PIC が正しいとすると、Chomsky (2001) 以降仮定されているフェイズの強弱の差をなくす事が出来るかもしれない。更なる経験的事実と理論的検証は今後の課題とする。
- (6) 動詞の分類と補文の内容については、Pesetsky (1992) を参照してもらいたい。

参 考 文 献

- Boeckx, Cedric (2011) "On Grammatical Maturation," Paper read in The 12th Tokyo Conference on Psycholinguistics, Keio University, Tokyo.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam and Howard Lasnik (1993) "The Theory of Principles and Parameters,"

- In *Syntax: an International Handbook of Contemporary Research*, eds. by Joachim Jacobs, Arnim von Stechow, Wolfgang Sternefeld, and Theo Vennemann, Berlin: De Gruyter. Reprinted in *The Minimalist Program*, by Noam Chomsky (1995), 13-127, Cambridge MA: MIT Press.
- Fowler, Henry W (1965) *A Dictionary of Modern English Usage*, Clarendon Press, Oxford.
- Fowler, Henry W (2002) *A Dictionary of Modern English Usage*, reissued version, Oxford University Press.
- Gen ey, Hideaki (1999) "Double Passives: On the (un)grammaticality of Some journalists have been attempted to be killed," In *Paper from the Fifteenth National Conference of the English Linguistic Society of Japan*, 31-40, The English Linguistic Society of Japan.
- Heageman, Liliane (1994) *Introduction to Government and Binding Theory*, Blackwell, Oxford.
- Hirai, Daisuke (2003) "On Double Passives," *Linguistics and Philology*, No. 22 pp.33-55, Nagoya University.
- Hirai, Daisuke (2004) "Control Infinitives and Two Types of CP Phases," *English Linguistics*, Vol. 21, No. 2, 241-264.
- 平井大輔 (2011) 主語コントロール不定詞における二重受動態, 研究発表, 2011年 関西言語学会第36回大会ワークショップ, 「例外現象再考による理論再検討の試み—ミニマリストプログラム, HPSG, 談話文法からのアプローチ—」
- Hornstein, Norbert (2001) *Move! A Minimalist Theory of Construal*, Blackwell, Oxford.
- Koster, Robert and Jan May (1982) "On the Constituency of Infinitives," *Language* 58, 116-143.
- Lightfoot, David (1976) "Trace Theory and Twice Moved NPs," *Linguistic Inquiry* 7, 559-582.
- Martin, Roger (1992) "On the Distribution and Case Features of PRO," ms., University of Connecticut, Storrs.
- Martin, Roger (2001) "Null Case and the Distribution of PRO," *Linguistic Inquiry* 31, 141-166.
- Melvold, Janis (1991) "Factivity and Definiteness," *MIT Working Papers in Linguistics* 15, 97-117, MIT Press, Cambridge, MA.
- Pesetsky, David (1992) "Zero syntax vol. 2: Infinitives," ms., MIT.
- Radford, Andrew (2004) *Minimalist Syntax: Exploring the Structure of English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Visser, Theodoor (1963-1973) *An Historical Syntax of the English Language*, 4 vols. Leiden: E. J. Brill.